

世界のしあわせを共創するプロセスデザイナー—SDGs Survey と LWC による Think Globally, Act Locally を実現する 市民生活教育の研究

研究員 薄羽 美江
白鳥 和彦



令和 2 年度から 4 年度、「SDGs 意識・行動変容調査—学習効果によるコンピテンシーの変化—」と題し、都内私立大学大学生を対象に SDGs 意識・行動変容に関する調査を実施した（しあわせ研究所紀要第 4 号～第 6 号）。ミレニアル世代・Z 世代の学生においては、SDGs の重要性は認識されているが、その行動は、コロナ禍による影響は免れないものの、学生特有の経済的および生活上の制約から、直接エシカルな行動に移せる範囲が狭いことも判明し、SDGs やエシカルに対する個人の意識・行動変容を促進する社会的な方法・手段の探究の重要性が認識された。そこで、令和 5 年度は、エシカルな行動の志向要因や制約の評価について一般市民へと調査対象を広げ、「エシカル・トランスフォーメーションと幸福度向上に関する市民意識・行動についての研究」と題し、実際に社会活動を担い、地域コミュニティ活動を推進している市民を対象に、定量調査（SDGs サurvey、Well-Being サークル）、個別インタビューによる定性調査を行った。これにより、社会生産

活動に帰属してからの関心・行動の変容や幸福度に関しては、良好な人間関係構築の影響がトリガーとなっていることを確認し、また、エシカルな行動学習段階において、社会課題を自分ごととする SDGs 意識・行動変容にむけた課題についても得ることができた（しあわせ研究所紀要第 7 号）。そこで、令和 6 年度の調査では、地域市民調査のフレームを広げ、デジタル庁が各自治体調査を実施している LWC (Livable Well-Being City) 指標を通じて、過去からの継続研究結果との相関を調査した。地域幸福度 (Well-Being) の数値化・可視化により、市民の「暮らしやすさ」と「幸福感 (Well-Being)」がもたらす、市民一人ひとりの心豊かな暮らしと持続可能な環境・社会・経済 (Sustainability) の実現について可能性を調査し、また、エシカル教育の段階的成長についても、高校生を対象とした SDGs サurveyを通じて、これまでの大学生調査結果と比較調査を行った。

これにより、エシカル意識と行動の変容は、自己の世界観の拡張と、その課題を自分ごとにする。また、それが利他に通じる自らの幸福として、客観評価を超えた主観評価として意義あるものとする。さらに、自らの世界の見聞を広げ、自らの存在と世界のつながりがプロジェクト・ラーニングされる重要性が得られた。